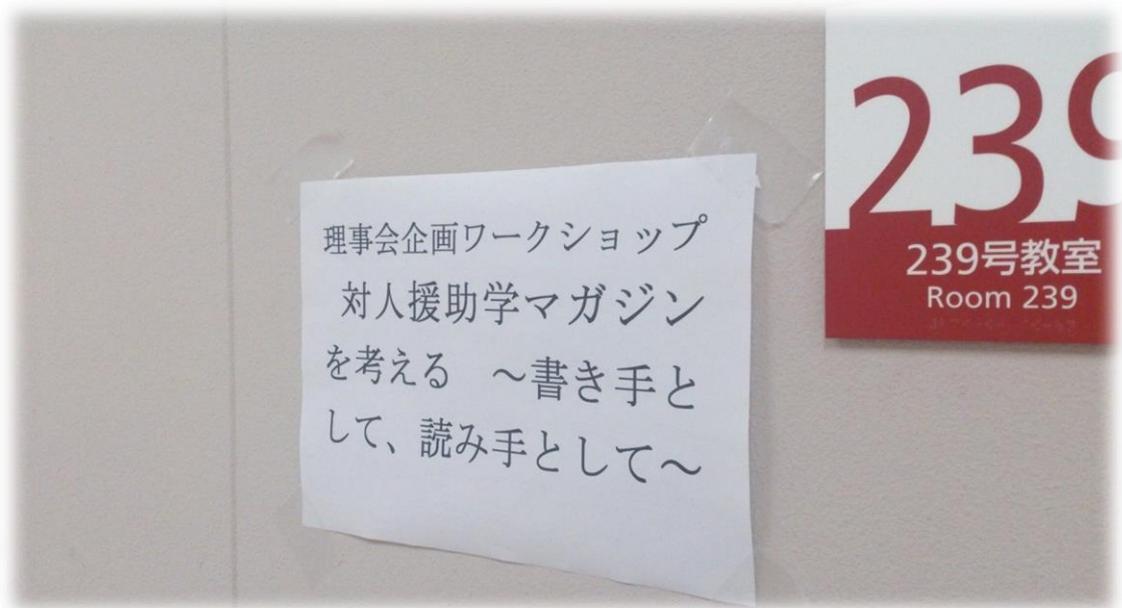


ワークショップ「対人援助学マガジンを考える」

～書き手として、読み手として～

誌上で再現！！

対人援助学会 第5回年次大会 二日目 企画ワークショップ（2013年11月10日）



平成25年11月9日10日の二日間、立命館大学敬学館にて、対人援助学会第5回年次大会が行われました。大会2日目には、毎年恒例となっている、「対人援助学マガジンを考える」ワークショップも、参加者と共に和やかに行うことができました。今回は、執筆者・読者の参加から成るワークショップを誌上再現と言う形で、対人援助学マガジンの持つ機能・役割・影響についてお伝えいたします。

編集長不在の中で、ワークショップを担う！！キーワードは、「新しくも古臭い?!」

今年度の大会に、編集長が参加できないということがわかり、千葉副編集長、連載執筆者木村、坂口が共にワークショップを担うこととなりました。

そもそも、千葉と木村は、マガジン連載が縁での出会いであり、千葉と坂口は、京都での勉強会や仕事を通しての知り合いでもありました。そここの縁がつながり、年齢の近い3人が力を会わせる初めてのワークショップです。

千葉・坂口はまだしも、木村は北海道。3人揃っての打ち合わせは、ワークショップ前日の夜に居酒屋で、と、なんとまあ、気楽な打ち合わせとなりました。気楽過ぎて、この日

の打ち合わせでのキーワードは、「対人援助学マガジンは、WEB を使った新しい発刊スタイルにも関わらず、どこか古臭いよね。」というものでした。

さて、どんなワークショップ当日を迎えたのでしょうか？



ワークショップを担当するのは、副編集長千葉晃央・執筆者木村晃子・坂口伊都

6対1 ワークショップ開始

ワークショップに集まったのは、書き手6人、読み手1人という面々。それぞれの自己紹介からスタートしました。前半30分は、担当している3人がマガジンについて感じていることを話ながら、後半1時間は参加者とのディスカッションで活発に時間が流れました。

対人援助学マガジンの振り返り

千葉)ほな、ちょっとマガジンの振り返りですけど、今までは14号まで出ていて、年四回発行、創刊号は70ページあったんですけど、今は、212ページ。連載限定でやっています。そういうところから、出版物、本になったりとか、木村さんの原稿は応用化学人間研究科、立命館の入学試験に使われるというようなことが起こったりとか、あと、現場で講師とかやっている人も多いので、自分の執筆が教科書になって対人援助の次の養成のために、直接役立っているようなこととか、あとは執筆している人が講師とか講演とか、ほんとに活躍されることが多いなという印象があります。

編集会議では何をしているの?! 編集会議の70%は…???

千葉)編集会議っていうのを、一応締切日がだいたい25(日)ですよね。その次の週か、次の、次の週かに、私とそれからもう一人の編集員大谷多加志さんがいますので、編集長のところに集まって話をしているんですけども。その時によく話をするのは、「最近頑張っている?」っていう話が一番で、それが全体の70%ぐらいかな。全体の70%ぐらいっていうのは、私とか大谷さんが、普段の仕事プラス、こういうことをずっとやっているということに関する、エンパワメント、カ水みたいなのを注いでくださっていて、心理的支援、っていうのを編集長がやってくださっている感じがします。

その残りで、目次の確認とかデザインの話とか、もうちょっとこうしたいほうがいいんちゃ

うか、という意見が届いているよ、みたいなのを確認するっていうのが、あります。

ページも執筆陣も増殖型。編集は大変？

Q: 木村)編集作業について、当初から団編集長は、「簡単なんだ」みたいな言い方をされていたんですが、これだけ、執筆陣が増えるにあたって、本当に簡単なのだろうか、という、あの本当にたくさんのかたが期日にメールなんかで、原稿を寄せる、ということで、それをまた編集部の中で割り振りをして、最終的に形づけていくというところで、**本当に、簡単に編集しているのだろうか？**というのを書きながら考えているんですけども、そのあたりは、いかがなんでしょうかね？ぶっちゃけ、というところで・・・

A: 千葉)あの、普通本が出るにあたっては、執筆者が締切日に原稿を届けない、原稿は締切迫ってからやるのがステイタスやないけど、そんなようなのもあったりとかしますけど、そんなことが（マガジンでは）起こっていないですよ。締切にほぼ揃っている。原稿料なしであるとか、あと、発刊日も遅れたりほぼしていない。あと、ページが何ページになっても大丈夫、印刷代関係ないとか。何でこんなんでいいのかについては、「**編集作業をいかに抑えるか、は大事や**」と、「**それが継続の秘訣や**」と団編集長は言っていたりします。

締切を厳守する執筆者たち。対人援助学マガジンは、書き手の自由度が大きい。

Q: 木村)最近坂口さんが、執筆を開始されて、2回連載された中で、編集のことだったり、自分が入稿するっていうところや、**編集部とのやりとりの中で感じること**とかって、どうですか？

A: 坂口)私、養育里親のことを書かせてもらっているんですけど、最初書くというのにあたっては、**別にこれと言って指示もなく、締切日だけがなんとなく教えられ**、で、書式もわからなくて、書式も別に、あの、「こういう風にしてください」とか「字数こうですよ」というのもないので、みんなどんな形ではるのかなと思いつつながら、最初書き始めた、というのを今思い出しました。で、2回出したんですけど、私、何を勘違いしたのか、**次の締め切りを間違えて、一か月も早く出した**と言う。なんで、私1か月前の締め切りを・・・

千葉)書きたかったんだ。(笑)

坂口)団編集長から、(原稿を出してから)「早いのはいいけど、1か月前です。」っていう返信メールがきて、で、今月始めて、団編集長の「原稿を書いてくださいね！」メールを初めて見て「これが噂のメールだったんだ。」と、一人で感激をして、やっと連載3回目にしてちょっとシステムがわかったかな、と。だから、こう、**自由だからこそ、すごく心配したりとか、いいのかな、とか、一人で焦ってえらい早く出したり**とか、そんなことが起きています。執筆をしての感想です。

木村)自由っていうところ言うと、私は小学校2年生の時から作家になりたい、という思いがあって、当時の作文、ていうか、日記なんですけど、それに書いているんですね。だからと言って何かに向き合ってきたかというところではないんですけど、例えば、作家

を目指すとか言っても**何も枠組みがないところで、永遠に自分が書き続ける、定期的書き続けるというのは非常に難しい**というなかで、きちっと区切りもって締切があって、そこにエントリーできるという仕組みがあることで、この14号まで、っていう蓄積されたものが自分の宝です。



*坂口) こういう（机上のマガジンの冊子を指して）紙ベースで読めるっていうのは、ちょっと憧れがあって、私はもうこういう製本が終わってから初めて連載をしたので、こういうものがある、というのは、なんかちょっと羨ましいなと思ったりするところもあるのはあります。

対人援助学マガジンは大きな育成プログラム！！マガジンは本屋さん？

木村) あ、昨日、「対人援助学会におけるWEBコミュニケーションについて考える」というワークショップに参加させていただきました。内容としては、今はパソコンよりどちらかというスマホで、ネットにつながる、WEBにつながるっていう方が数が多いのが現実だそうです。対人援助学会のホームページも、スマホユーザーがリンクというかアクセスできるような作り方をした方がいいとか、或いは情報を求めてくる人がすみやかに、その必要な情報に直結できるようなWEBの、ネットの技術を工夫したほうがいいとか。それともう一つはコミュニティとしてのホームページ。そこにやりとり、コミュニケーションが

発生するようなことを求めてつながる人もいるので、コミュニケーションみたいなのところの狙いをよく整理したうえで、ユーザーの現状もよく見極めて、ホームページなんかを作っていたらいいんじゃないか、というようなお話がされていたワークショップです。IT技術ということで考えると、かなりユーザーにとって便利な仕組みにはどんどんできる、技術的にできる、というようなお話を伺ったんですけど、例えば千葉晃央さんをクリックすると、1号から14号までワンクリックで読めるっていうのは、ユーザーにとっては便利なんですけど、**便利になることで削ぎ落とされる部分がすごくあるんだらうな、不便の中に含まれる色々な人を育てる機能、やりとり、そこで生じるコミュニケーションみたいなものが、インターネットをベースに世の中が進んでいくと、削ぎ落とされる部分がたくさんあるな**と思います。でも、マガジンはどこか古臭い。新しいのだけれど、WEBで誰にでも公開しているんだけど、どこか古臭いなっていうものを感じました。で、何かになって思った時に、**対人援助学マガジンは、本屋さんなんだ**、って私は感じていて、その、今やっぱり本やさんがつぶれていたりとかネットで本も買えるような時代なので、なかなか本屋さんが経営が難しくなって閉ざされていくというのも多いと思うのですが、マガジンの場合はそこが本屋さんで、従来本屋さんで自分が何か本を探そうと思った時に、店主に尋ねるとか、或いは自分の目でそれらしき場所に行って、2、3出して見て、その本探していたんだけど、なんとなくその辺にいたら、違う本に目が言って、その本手にとったらおもしろそうで購入しちゃった、みたいな、その、偶発的な出会いもあったりすることもあると思うんですが、対人援助学マガジンも、千葉さんのところに見に行きたかったんだけど、なんとなく目をやっていると、他の執筆陣の名前が、いつもサブリミナル的に自分の中に入っていて、(笑)執筆者の名前であったりとかタイトルがあって、ある時にどこそこをクリックしてみて、偶発的に出会ったとか、こっちを書いてあるところを、ちょっと見てみようかな、とか。その、手間暇みたいなのところがまだ残っているところが、**インターネットの技術とは裏腹な、その従来のアナログ的なものが残っているな**という臭いを非常に感じて、それは**自分で探す力であったりとか、興味関心が刺激されるっていうものが、すごくアナログな感じで残っている**っていう、本屋さんかなと。

坂口) この中が、**マガジンの中が本屋さん**かな、という感じ。私が実際にしたのは、早樫先生の家族造形法の連載を、児童養護施設の先生たちに、こんなやり方ありますよ、という研修をしましょう、っていうことになった時に、全部出そうと思って必死になって、けっこうな数があるので、私何号までやったんだらうってわからなくなりながら、全部打ち出して造形法だけを一つにまとめて先生たちに渡す資料みたいにまとめて、持っていったりとか、自分が参考にしたりとか、実際にしたことがあって。確かにその時に、そういうことをしながら手間暇かけながらやりながら、ちょっと気になる人のも見始めたりとか、自分がやっている作業とか、忘れていた、みたいな、感じになったな、というところは、実際に読み手の立場からあったなということが思って、本当に、便利そうなんだけど、けっこう面倒くさいし、振り返ろうとすると、何番目まで戻って、え？みたいな、わかん

なくなっちゃった、みたいな、ところも一生懸命しながら、それに向かっていくというか、意識を向かわせて調べようとするところでは、そういう手間暇感というのは大きいのかなと感じています。

千葉) マガジンって、本当に大きい育成プログラムだなと思って。編集に関しては、興味を持ってもらう、というところで、敢えて、その人のところをクリックしたらその人のところだけの一覧が出ないというようにはしていたりします。あの、例えば、坂口伊都さんというのをクリックしたら、今までの全部の連載が、そのページからアップできる、というのはわざとしない。

あの、そうそう、だから本屋さんに行ったら自分の領域の隣の領域がなんの領域か、というのが本屋の棚でわかるんだけども、アマゾンやと狙い撃ちで、押さないと知らないというよく言う、専門バカ、にならないようにっていうことが起こる仕掛けみたいなことで。さっきも、今日の発表の中でプロセス自体が支援である、っていう話と一緒に、特にこう探すことでこう隣が見えてくるよ、っていうところにも、専門バカにならないように、他のところにも知恵を借りることができる人になるように、とかっていうことで仕組みができていくのかと思う。

ところで、執筆者短信って？

Q:牛若) そもそも執筆者短信というのは、どういう役割を果たしているのか？

A: 千葉) 短信の位置づけ。短信の位置づけは、まず、執筆している人がどんな人かというのを更に深く知って欲しいというのと、あと二百なんページ全部読むと言う人はいないだろう、っていう時に、あの、木村さんだけ読んでもらってたらええのか、じゃなくて、やっぱりいろんな人のことも知って欲しいという想いで、そのためにも少なくとも短信だけは読めると、だから短信ではみんなに出会えると。あ、ちょっと〇〇さん、こんなことやっているの？じゃ連載どんなんやっているの？っていう仕掛けですね。そういう風なところからやっています。

書き手として・・・書くときに気をつけていることは？

～書き手と読み手が同じ土俵で理解できることを意識～

西川) みんなすごい難しいこと考えてはる人達の集まりやのに、私こんなの書いていいんやろか、と思いつながらいつも書いているところが少しあるんですけど、ま、こういうのもあってもいい、っていう、いろんなのがあるからいいんだって、無理やり自分に言い聞かせて。先ほど、坂口さんがおっしゃっていた自由だから心配やねん、心配やけれど、自分で、なんていうかな、責任が気持ちいい感じですね。2、3回は本当にこれでいいの、とか、もやもやしていたけれど、あ、これはもう私がしっかり決めて、これでいこうと思ったら、それに関して、編集の方々は何にも仰らない、もう好きに、ほんまに好きに自由なんやと思って、じゃもう好きにやろう、って。好きにやるってことは、例えば、学会とか

で何か発表します、授業で何かを言います、っていうのも責任がありますけれども、インターネットの責任って何だろう？っていうのが、まだちょっと慣れていないところがあって。インターネットで公開されて、言ってみれば世界中に出ちゃうじゃないですか。環境さえあれば。その時の、こういう対人援助学会が出している対人援助学マガジンというパッケージはされているけれども、その中の個々人の責任というのがものすごく強くて、で、それが不思議な形で面白いなって、思うんです。で、さきほど木村さんが仰ったみたいなの、背筋が伸びるといふか、責任をすごく感じさせてくれる、で、自分勝手な理由だけではあかんねんな、っていうのを思いながら書いたり、あと、書く時に、坂口さんも先ほど、養育里親というのをしっかり言わなきゃ、というのを仰った形で、私は、**だれが、どんな人が読むかわからへん**、対人援助学に興味っていうか知識が全然ないけれど、なんかマガジンゆうて面白そう、って見はる方とか、が、見た時に、例えば、社会福祉士養成校って何なんだ、とか、**私が知っている言葉をやわらかい言葉に言いかえたら何になるんだろうか**、そんな感じでできるだけ説明をいれたらいいのかな、でも入れすぎたら、もう説明だけで面倒くさくなっちゃうんで、それをそう説明しようか、説明したほうが、しないほうがいいのかと、思いながら**全然関係ない人が、その分野にね、関係ない人が読む時に、どれくらい説明したらいいのかなと、匙加減を考えたり、**することはあるかなと。

千葉) そのあたり、中島さんも、匙加減は・・・

中島) いつも苦しんでおります。皆さんみたいに、書くときにそんなに深く考えていなかったなと思って、だんだん、ちっちゃくなっています。(笑) ただ、**心がけていることは、専門用語はできるだけ使わない。**

Q:木村) 中島さんが、今、仰った専門用語をあまり使わないようにっていうのは、読み手が専門職ばかりではないとか、そういう専門職以外の人に届いて欲しいとか、みたいな何か狙いっておありなんですか。

A:中島) 例えば、学会とかに来ると、まず言葉で圧倒されてしまうことがあるんですよ・・・英語や専門用語が飛んできて、あれ？と思う。そういうところでエネルギーは使いたくないな、と思うので。普通のことばできっと皆さん感じてもらえるところがあると思う。**同じ土俵に乗れない、ということがあってはいけないので、**話すような感じで、っていうことを意識していると思います。

余談？脱線？

Q:マガジンを売る手段はないのだろうか？

木村) 執筆者が自ら編集を考え、締め切りを守り、内容も構成も考え、かつ、経営も考える？！

一同) 笑

西川) あ、でも、面白いと思う。その言葉で思い出したんだけど、それこそ、全然畑違いかな、と思うけど、ドラッカーなんかは、そんなこと言うじゃないですか。組織ってい

うか、人の集まりがあったらまず、末端の人が一番中心のことを考えている、っていう。本当に末端の人までが、中心のことを考えていることによって、一人ひとりが「じゃあ、私どう動いたらいいねんな。」ということがあって、色々考えている人が集まるから面白い集団になるんだよ、ということを書いていたような、解釈が違うかもしれないですけど。そんな感じですよ。経営のことまで、一人ひとりが、執筆者が、大丈夫かな、と。

読み手から書き手への質問！！～自分を律する原動力は？

連載をしての影響は？～

宍戸) もう答えられた部分もあるかもしれないんですけども、ま、さっきから、**締め切りを守るとか、年4回やるとか、永遠に書き続けるとか**、それ書こう、原稿を書く、ということの、自分を律する、締切を守るとか、逆に原動力って、何なんだろうって。ま最初からだったのか、それともやり始めて、こうだんだんそういうのが出てきたのか。あと、読み手からの反響とか、これを書いて、書き始めたことで何かこういうことにつながっている、現実の世界からいろんなことがあったとか、そういうことあったら、教えて欲しいなと思います。

千葉) 障害者の現場で10何年も働いていて、現実を伝えたい、みたいのがありますね。ま、自分の現場が良くなるし、ひいては利用者が、充実した生活を送る。で、知的障害者の人が働いている現場の本とあって、本屋に行ってもほぼないんですよ。なので、ここは、一段「知的障害者の労働現場」ってもらっているんで、そういうことを発信していくっていうのは、ずっと現場で利用者の人にお世話になっていることへのお礼じゃないけど、ま、私にとってのソーシャルアクションかな、外に出していくっていうのが。・・・原動力はそれかな。あと、なんやったっけ？反響、ね。反響はね、でもやっぱり、この人講師に呼ぼうか、じゃないけど、あ、なんかいやらしい話かな？ものを頼む時に、こういうところで、こうやって文章も書いてる人やっていうのは、わざわざ言わへんけど、ま、あの調べてくれはるからね。チバアキオって誰？って。そんなら、これを書く前と書いたあとは、私の名前のヒット件数が断然違うし、そういう、たぶんそういうのって、はっきりこう、じゃないかもしれないけど、また、効果があるのが10年後とかっていうことも可能性も、この原稿を元に本になるとか言うのも、とか思ったら、後のこともあるかなと思って。けど、書いてんのはメリットの方が多いですね。こんぐらい書いて、「こんだけのものが返ってくるんやったら、っていうのは。

坂口) あ、**締切守るっていうのは、もう、締切守るって聞いているから、聞いているので、**受けた時からその緊張感が走ったところが。原動力っていうところでは、さっきも言ったんですけど、養育里親というものが、ものすごく揺れ動いているけど、それはごく一部の人しか知らなくて、里親 VS 施設、とかね。なんか、そんなお互いに批判し合うとかいうような、部分の構造が現実にあたりして、っていうところでは、やっぱり子どもをどう囲んで、そのためになんとかしたい、という人達がなんで対立せなあかんねんな？って

うところは思っていて、そのメリット、デメリット、それぞれあるという中での、私の立場とか、考えとか、私は実際にやってみたいと思っていたりとか、そんなところは、伝えていきたいけど、それこそ、難しくではなくて、もっと身近に、あ、そんな考え方もあるねんな、って、ちょっと、感じてもらえたらいいな、というような、なんかすごく大切に、**変な誤解を生まないように、大切に伝えようと育てているような感覚で書いているかな**っていうところがあって。で、まだ2回なので、何が変わったっていうのは顕著なことはないんですけど、ただ、養育里親しています、とか言うときに、なんで？とか返ってくるので、「詳しくはWEBで」って、ネットで書いていますっていうような、感じのことが言えるので、**短い会話の中で、誤解を生むとかではなく、心を込めて書いたものを読んでもらって、その方が何を感じていただけるのか、**というようなところの**媒体**にはなっているのかなと。ただ、また、家族のこととか、すごいいっぱい出てくるので、けっこうそのへんは、すごく気を使っている。その、社会的養護とかいうところで、暮らしている子ども達の立場とか、それを支援している人のこととかも、それぞれに気持ちは込めて書いているつもりではあります。

木村) 私、創刊号からエントリーしているんですね。で、一応これ、WEBだし、お金も発生していないってことで、特に、締め切りを過ぎてとというか、載れなくても影響ありません、みたいな団編集長からのメッセージを最初の頃に見たことがあるんですね。あ、最初の頃って、一番最初の時だったか、「**締め切りに間に合わなければ、その回に載らないだけです**から」みたいな。逆に、創刊号からエントリーしている人間が、途中で抜けるっていうのが、自分の中でなんとなく、嫌で、全部自分の名前がちゃんと載っていたい、という、**継続の中の自分の位置ど**りっていうか、あるんですね。なので、あの、どんなにひどいことになっても、ひどいっていうのは、自分の文章があれでも、絶対、ここには登場しておこうっていう意識が、自分を律している、という原動力になっています。反響、影響としては、今年の、立命館の大学院の試験問題に使われたということですね。私の父と母のことを書いた内容のものが試験に使われたんですが、そのことを事の他喜んだのが母だったんですね。なんと名誉なことを、と。(笑)でも、父と母のあまりよからぬことを書いたにも関わらず、喜んでもらったのは、意外な反響だったかなと思います。

西川) たぶん、他の執筆者の方は、けっこう団先生とかから、書きなさいとか書いてみたらと言われてたりっていうことやと思うんですけど、**私は自分から無理やり、書かしてください、って言ったんです。だから、やめられないんです。**

一同) 爆笑

千葉) 自己決定！

西川) だから、その分、すごい人たちがいっぱいいる中で、私が無理やり入らしてもらったのに、やめますなんて言えないや、と思って。だからそれ、自分自身に課しているところあるんですけど、いまだに一月位から、わ、もう一月後や、とかってね、どうしようって、思って。書くのにすごく時間がかかって、何回も書き直して、泣きながら書いてい

んですけど。ほんで、書きあげたら、もう書く事ない、もうない、って14回も書いたらもうないわって、思うのに、また出てくる。

一同) 笑

西川) なんでや? って思うんですけど。あの、何かないかなと思ってみたら、あ、これもこれもこれも、って、テーマが連なったものが日常生活にすいっと出てくるんですよ。何だこれ? って思って。そして、書ける。もうそんな感じで書いているっていうのがありますね。それが、締め切っているとか、しんどいなと思いつつも、書けているというか、書かねばならぬと思っている部分。私は元々、専門学校の教員になる前に、専門学校だから、専門知識を右から左へ流すみたいなのが教育なのかなと思ったんです。小中学校でなくて、専門学校は専門職を作るための学校やから、その知識とか技術とかスキルとかマインドっていうものを、こう右から左に流すっていうだけのことやと思つたら、いやいやいや、これソーシャルワークだ、って感じのことがいっぱいあって、こんなに生々しいと言うか、躍動感のあるというか、専門職になる直前の人達に出てくる葛藤みたいなもの、学生の動きとそれに対応する教員と、このダイナミックさっていうもの、面白いのに、そんなん書いている文章ないよね、ってちょっとこれ書こうかなと思つたっていうのが、一番、書く、でおもしろいところ。あとは、さっき、牛若さんが見てくれて、ハッと思つたんですけど、顔もみたことがないとか、お話もしたことがない人が、あの、それを読んだんですけど、っていわはった時って、誰かが私の文章をどっかで見ているっていうのは、どう処理したらよいかかわからない。わっていう気持ちがある。どう考えたらいいんでしょう、これって、という気持ちがあります。はい、そんな感じです。

牛若) 僕も、実は、団先生に書きなさいっていわれたんじゃなくて、自分から書くって言って、首を突っ込んでいった方です。6回目になるんですけれども、首を突っ込んだ以上は、絶対に締め切り守らなアカン、という。その時ぼくは、修士論文を書いた、まあ、書く勢が強いっていうのが、あの自分史、自己物語を書いているんですけれども、自分のことでありながら、僕は作家になって書いていました。で、このマガジンを書くのにも、あの、作家が締め切りを守るっていうそういうスタイルで書いているんです。それで、だいたい、4、5ページのをペースにして書いているんですけれども、例えば小学生だったら、小学生の、なにになについて、今回は書くっていうちょっと完結したような感じで書いているんです。その方が、読み手としても読みやすいんだろうし、そこだけ読みたいって思っている人の、読みやすいんじゃないかなって言うところに気をつけて、だいたい4、5ページに収まる位で、書いていまして、そういう風に書いてみると、やはりその自然発生的に、責任というものが伴うというのが自分の中でだんだん、わかってきたような気がします。で、ま、あの、僕は割と自分を売り込みたいという性格なもんでして、だからこそ、ま、今は続いているのかなって言う感じがあって、研究発表なり、なんなりでも、とにかく自分を売るということが、まず第一として書いています。自分を売ることで、人からどう思われるか、じゃなくて、自分が何を思って、ここで発表しているかっていうことを、まず

第一に考えて、あの、マガジンの執筆をしています。で、その結果、ま、あの2週間前に、ある研究会で知り合った方から、あ、マガジン読みましたよ、っていきなりメールがきて、そんで、けっこう、深い考察されているんですね、って、言われて、いやあ、考察をしている訳ではないんですけど、マガジンやからもうちょっと、修士論文をちょっと柔らかくしたつもりで書いているんですけど、やっぱり、ちょっとカタブツさが見えてきたんかなと。ちょっと、なんかそんなことを考えながら、また書こうと思っています。

中島) 締切のお知らせメールがくると、「うわあ、きた～」と、まるで定期試験。続けるとかやめるとか選択の余地はない(一同笑)、こういう風に、みなさんと話をしているとそういう想いで書いてらっしゃるんだ、とわかって心強い。他の方とお顔会わせできるといいなと思って今日はこのワークショップにきました。

(*一通り執筆者の回答を終えて・・・)

千葉) こんな感じでよろしいですか？

穴戸) はい

木村) だんだん、書きたくなりました？

穴戸) いやいや・・・さっきの木村さんの、団先生の言葉。「遅れたらただ載らないだけ」って、これ現実をただ言っているだけだけど、なんか、怖い。(笑)

マガジン自体が対人援助？

木村) このマガジンの仕組みとか、今日のみなさんのお話が合わさったもの自体が、対人援助だなんていう気がしていて、あの、私は高齢者の部分を支援している、ケアマネジャーとして、要介護の方の支援を、ケアマネジメントをしているんですが、何かしてあげる人、ではないんですよ。やはり、その方の、高齢者であろうが、要介護であろうが、その方が、自分で自分の問題に立ち向かっていくところを支援していくっていう、あくまでも、添え物、私が添え物にすぎなくて、そういう意味では、**ご本人が自分の問題に立ち向かうよ、とかそういうこと、自分で自分の問題を編集する、みたいなのところにいるんだな、**っていう、この**マガジンの仕組みと、対人援助の実践現場との、形がちょっと共通する**ところがあるかなっていうことを最近時々感じます。

千葉) あの、近江商人が三方良しとか言ったりしますけど、そんな感じのところがあ。書き手もいいし、読み手は勿論、知りたい事知れたりとか、今まで、触れて来られなかったところの人の話が触れられたりするし、で、結果として、その執筆者の人がいる現場を多くの人を知る、感じていることを知る、ということができるので、そのソーシャルアクションっていうか、そこに焦点があたるスポットライトが当たるきっかけになるので、あの、三方良し？(笑)現場もよし、当事者もよし、書き手も読み手もよし、みたいな、感じでは思っている。で、また、ここでこういう風にして、知り合いができるじゃないですか。ここに、こうお名前が並んでいるから、話かけられたり、あの、こういうことについてちょっと知りたい時に、この人にちょっと聞いてみようとか、できていたりするので、

あの、だから新しい関わりなんですよね。ここに、共同執筆できるから。しかもこれ、連載やし。ただ、短編ぱつと、一回一緒のところに載るだけやったらそんなんで、わざわざ一緒にしてます、みたいな言わないし。新しい装置ですよ。プラットホームですよ。

西川) でも、そういや、他のところで、あ、連載しているんです。あ、連載しています、っていう、そんな言いあいっこってないですね。

千葉) ない！

西川) 連載しています、って面白い自己紹介。

坂口) ね、読んでます、とかね。

西川) 読んでます～って。

千葉) ね、ここで、共有体験がね。

坂口) あの、勝手にイメージするじゃないですか。その、この方の文章とかレイアウトとか見て、こんな人かなとかね。で、イメージと全然違ったとか。(一同爆笑) なんか、そんなも、面白いなって。

牛若) さっき木村さんが仰っていましたが、どうしても視覚障害なので、援助される方に回られるっていうような感じがあるんですけど、ここでは、おれは援助ばかりされてないよ、みたいな、そういう色を出したいというようなことでずっと書いているんですよ、で、おれも誰かを援助しているぜ、ってそういうことが、マガジンを含めてこの学会で、どれだけ出していけるんだろうかっていう、ちょっと挑戦の意味もあって、書いていることがあります。

1 時間半のワークショップの感想！！

坂口) 私、去年横浜に行ったんです。学会で。で、団先生がやっているワークショップに、出て、もう訳がわからずに。その時は訳がわからなくて、ただ、読み手として。マガジンのわからないことを去年はぶつけてきて、去年は。で、今年はまた団先生ではない、ヴァージョンで初めてのワークショップと言う中で、これだけ、執筆者が揃う。自分でやっているから思うんですけど、その中での、それぞれの想いとか、こうしんどさとか、なんか、ね、みんながすらすらと書いてはるのかなと勝手に思ってしまうところがあるじゃないですか。でも、こう、みんなそれぞれ一生けん命、同士が、この11月に入った同士がまだいるんやなと思って、

一同) 笑・・・

千葉) 締切前やね。

坂口) みんな、まだやっていない人もいるんだ、と。それだけでも心強いと。なんか、この新たな形も面白いかなと、また違うものが、なんか今日は体験できたなと思って楽しめました。ありがとうございます。

千葉) よかったら、最後、一言づつでもいただけたら、ね。

西川) いや、あの、すごく楽しかったです。このワークショップすごく楽しかったです。

今、坂口さんが仰ったみたいに、すごく、同士っていう感じがしたのと、あとは、こんなつながりってすごく、気持ちがいいのに、あんまりないなと思って。先程も申しましたけど、あの、馴れ合いじゃないけど、仲良しで。で、負担じゃないけど、つながっている感じで。変な感じ。で、嬉しいっていう感じがしました。はい、以上です。

牛若) また、これからも書き続けると思いますので、あの、特に執筆者短信はかなり硬いことを書くと思います。今日、このようなワークショップに参加できて、本当に、良かったです。また2週間、もう、あの、また締切がくるんやなど。

一同) 爆笑

牛若) そこで、憂鬱にならないというところが、またいいところだと思います。ありがとうございます。

宍戸) はい。ええ、こういうの書いてはるかたの言葉とか初めて聞いて、知っている人がいたので、身近には思ったんですけど、みなさん、こう、それぞれの想いで締切を守るっていうのも、いろいろな想いがあってやってはるって、自分だったらできるのか、とちょっとわからないんですけど、ちょっと、いい機会、いい場に出させてもらったなど、思います。ありがとうございました。

木村) 本当に楽しかったです。そしてやっぱり、まあ、編集長も書かれておられていましたけれど、本当に書かれているかたが、自分の現場を楽しかったりとか、そういう目でみて、ネタにするっていうと、ちょっと言葉が下品かもしれませんが、そういうふうにもまた見直ししながら、自分を見直ししながら、世の中にエントリーできる場があって良かったなと思っています。で、副編集長に代わって、編集長に代わって、15号の締切は、11月25日です。

一同) 笑

千葉) よろしくお願ひします。私もとても楽しかったです。今後共、よろしくお願ひいたします。新しい企画とか、なんでもご意見等いつでも受付中ですので、みなさんと一緒に活動できればと思っております。じゃ、ありがとうございました。

一同) ありがとうございました。

参加者

(書き手) 千葉晃央 木村晃子 坂口伊都 西川友理 牛若孝治 中島弘美

(読み手) 宍戸俊一



ミニ編集後記

編集作業は難しいです。でも、面白い！また、ひとつ世の中に楽しみを見つけてしまいました。また、機会があれば編集に挑戦してみたいです。もっと、おもしろおかしく編集ができるようになりたいです。日々の仕事を、人生を編集しながら楽しんでやっていきます。ワークショップの面白さ、100%は誌上再現とはなりません。モヤモヤ感が残る方は、来年のワークショップでお会いしましょう！！（まとめ きむらあきこ）